

シテ島

王権の中枢

紀元前1世紀、ガリアのパリシイ族が後にシテ島となるセーヌ中洲の島に住み着き、ルテティアという町をつくります。5世紀になると、この街はパリと呼ばれるようになります。6世紀には、フランク族の初代王のクロヴィスが、シテのパレ構内に王居を設けました。その息子ヒルデベルトによって、パリ初の大聖堂が建築されます。10世紀末には、カペー朝初代君主のユーグ・カペーによってパレ内に評定院と行政機関が設置され、王権の中枢となりました。

王に見捨てられたパレ

1248年、レイ9世がサント-シャペル創設を認可した時にはすでに、隣のノートルダム大聖堂には現在のファサードが備っていました。1358年、王太子（後のシャルル5世）の目の前で、父親のジャン2世善良王の評定議員らが暗殺されます。即位したシャルル5世は、より安全な場所に移る決断をします。こうして、王のパリの居所のひとつであるサン-ポール館が選ばれました。今日この館は残されていません。シャルル5世は、さらにルーヴル宮、ヴァンセンヌ城へと移り住みます。王政機関、高等法院、司法省、会計検査院は、カペー朝のシテ王宮にしばらくの間残されますが、世紀を経た末に、司法機関と付属の牢獄のみが最終的にこの地に残されました。

今日、サント-シャペルとコンシエルジュリのみが、現存する最古のフランス王宮の建築物となっています。

用語集

ガラス窓：複数から成るステンドグラスか、単一の大ステンドグラスがはめられた窓

隅柱：アーケードの角部にある三角形の面

聖遺物：聖人の骸骨、あるいは聖人に属していた物

大聖遺物箱：聖遺物箱で、大きな櫃あるいはガラスケース製で、聖人の遺物を保存していた

柱頭：柱の頂におかれた切込石や彫刻石で、その広がった形のためにアーチの起拱点に用いられた

張り木：透かし彫りを施した小さなアーチで、中央天井を支えながら、柱を側壁に結びつけるもの

ブーストロフェードン：、左から右、右から左と蛇行しながら、下方から上方に向かう読み取り法

無窓アーケード装飾：壁に切り抜かれた、小さなアーケードを組み合わせた建築装飾で、壁上であるために無窓と呼ばれた。

ランセット窓：ガラス窓の垂直方向の分割

役に立つ情報

見学に要する平均時間：1時間

身体の不自由な方向への特別見学あり



国立モニュメントセンターは、フランスのモニュメントに関するガイドシリーズを翻訳版で出版しています。文化・歴史遺産バージョンは書店ブティックにて販売しています。

Centre des monuments nationaux
Sainte-Chapelle
Palais de la Cité
4 boulevard du Palais
75001 Paris
tél. 01 53 40 60 97
la.sainte-chapelle@monuments-nationaux.fr

www.monuments-nationaux.fr

サント-シャペル

レヨナン式ゴシック建築の至宝

シテ島内の立地

シテ島のパレは、10~14世紀に王権の中枢および居所となりました。パレは、サント-シャペルとコンシエルジュリを包括していますが、新たな配属によってこれらはパレ・ド・ジュステイス(裁判所)に組み込まれました。1242年から1248年にかけて、レイ9世(1226~1270年在位、後にサン・ルイと呼ばれた)の命により、キリスト受難の聖遺物*を保存するためにサント-シャペルが建築されます。これらの聖遺物の中でも最も有名な茨の冠は1239年に獲得され、その金額はサント-シャペルの建築費用を多大に上回るものでした。



宗教的・政治的影響

聖遺物*は、4世紀以降コンスタンティノーブルの皇帝たちによって所持されていたもので、レイ9世がこれを買取ったことで、フランスとパリの威光が高められました。とりわけパリは、中世ヨーロッパにとっての「新聖地」となり、キリスト教の第二の首都となりました。フランス革命時に、神授権を持つ王政の象徴であるサント-シャペルが多大な損傷を受けたにもかかわらず、そのステンドグラスは大きな被害を免れています。1846年以降、サント-シャペルは大修復活動の対象建築物となり、現在の外観を得ました。

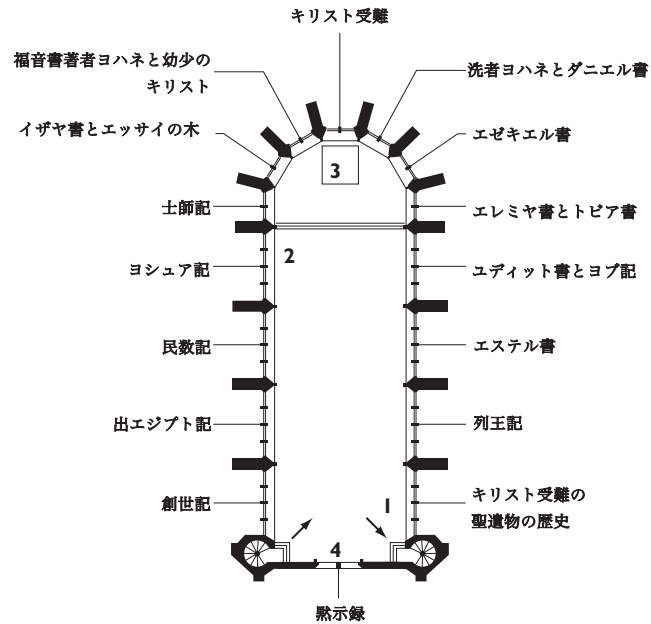
*裏面に解説あり

上下二層の礼拝堂

当初から、聖遺物*は上層礼拝堂に展示され崇められていました。ここへは王と側近の者、ミサを執り行う司教座聖堂参事会員のみが、当時パレと連絡していた外側のテラスから出入りを行っていました。下層礼拝室は、パレ関係者にとっての信仰の場となっていました。半円状の後陣を持ったバジリカ式の設計で、簡素なつくりになっています。後に、ヴァンセンヌ城やシャトーダン城などのサント-シャペルのモデルにもなりました。

下層礼拝堂

正面入口では、礼拝堂の守護聖人である聖母マリア像が訪問者を迎え入れています。19世紀の修復活動の際に、ポーチの彫刻装飾とともに、内部の多色装飾が修復されました。後陣左側にある旧聖具室の扉の上方には、13世紀のフレスコ画によって聖母マリアへの受胎告知が表されています。これは、パリで最も古い壁画です。扁円形天井は、透かし彫りを施した張り木*で支えられ、この張り木が、側廊の柱を側壁につないでいます。側壁には、三つ葉飾りの無窓アーケード状装飾*と、使徒を表した12のメダイヨンが飾られています。柱には、ルイ9世の母ブランシュ・ド・カステュー王妃の紋章である、ドーム型の紺碧色の背景上に描かれたフランス王朝の百合と、真紅の背景上に描かれた塔が交互に配置されています。



上層礼拝堂の入り口にて、ステンドグラスの詳細説明案内をお求めいただけます。

上層礼拝室

上層礼拝室は、まさに巨大な聖遺物箱というべきもので、豪華な装飾が施されています。彫刻とガラス窓*によって、キリストの受難が称えられ、光と色彩にあふれる天のエルサレムに到達したかのような印象を与えます。サント-シャペルのステンドグラスは、建築されるや否や有名になりました。15のガラス窓*には、1113の場面によって、創世記からキリストの復活までの人類の歴史が描かれています。14のガラス窓には聖書のエピソードが描かれ、左から右方向へ、下方から上方へ進んでいきます。

- 1 キリスト受難の聖遺物を物語るガラス窓は唯一、ブーストロフェードン法*で読むように配置されています。ランセット窓*の低部には、聖ヘレナによるエルサレムでの聖遺物の発見から、フランス王国への到着までが語られています。

- 2 聖ペテロ像は、他の5つの使徒像と同様に、複製ではなくオリジナルです。聖ペテロは天国の鍵を手にかけています。12使徒の像は「教会の中心人物(柱)」であることから、身廊のリブボルトの起拱点に、象徴的に置かれています。これらの像は、調和に満ち理想化された姿を特徴とする1240年代から1260年代のパリの彫刻を物語っています。
- 3 大聖遺物箱*には、キリスト受難に関する22の聖遺物*が保存されています。その中には本物の十字架の破片、茨の冠などがあります。この箱はかつて高壇に展示されていましたが、フランス革命時に溶解されてしまいます(貴金属を回収再利用するため)。残された聖遺物は、パリ・ノートルダム寺院の宝物庫に保管されています。
- 4 西のバラ窓はヨハネの預言書である黙示録を表していて、内陣の軸ステンドグラスのキリスト受難の正面に、象徴的に配されています。バラ窓の中央には、終末期に生存者と死者の審判のために戻ってきた、後光に包まれたキリストが描かれています。

側壁の100の柱頭*には、それぞれに異なった葉模様*がつけられています。アーケード状装飾の施された隅柱*には四葉飾り*が設けられ、天使たちが42の殉教の場面を語っています。

*裏面に解説あり